

---

# ハコ

松嶋ネコチロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハコ

### 【Nコード】

N7934K

### 【作者名】

松嶋ネコヂロウ

### 【あらすじ】

ある日、僕の部屋には白い箱があった。

ある日、部屋の隅にぼつんと白い箱が置かれていた。

それは一メートル四方くらい大きな箱で、取っ手や窪みや鍵穴のようなものはない、完全に真っ白な立方体だった。遠目には何で出来ているのかも分からない。鉄、木、プラスチック、陶器。そのどれにも見えただけ、逆に言えばそのどれにも見えない。

僕は虚ろに霞む視界でベッドの上からそれを眺めた。

いつの間にこんなものが置かれていたのだろ。僕がベッドに入る前はこんなものは無かった。夜中、何度も何度も眠りから飛び起きたときも、こんなものは無かったはずだ。

とすれば、と僕は壁掛け時計に目を向けた。七時三十二分。僕がようやく眠りらしい眠りについて三十分弱。この間に何者かがこの部屋に箱を運んできたことになる。しかしそれはおかしい。僕は部屋の鍵はきちんと締めていたはずだし、窓の鍵だってしばらく開けていない。

頭が重い。いつも以上の鈍痛に思わず頭を抱えた。

僕は鉛で出来たように重い体を起こして、その箱に歩み寄り、手を触れてみる。

すべすべした肌触りだ。新品のガラスだってこんなにすべすべとはしていない。触ってみてもこの箱がどんな素材で出来ているかは分からなかった。傷も無ければへこみもない、牛乳よりも濃い真っ白なその表面に、僕は吸い込まれそうになった。好奇心で持ち上げてみようとしてみるが、持ち上がらない。重さもそうだが、取っ手もないつるつるすべすべした正四角形なので、さらに持ち上げにくい。その後も叩いてみたり揺すってみたりしたが、結局箱について何も分からず、僕は諦めて学校へ行く支度を始めた。

腕に制服の袖を通し、学生鞆を肩に掛け、部屋を出て鍵をする。

毎日のように鍵を掛けるようにしているのは僕が不在の時に家族に入ってこられないようにするため、特に部屋に何があるというわけではないのだが、何というか、誰かに勝手に自分の部屋に入られるというのは僕にとって落ち着かないものなのだ。ここ最近は特に強くそう思う。何故なのかは不明なのだけれど。

階段を降りてリビングへ向かうと、妹が朝食のトーストを食べていた。僕に気付くと軽蔑するような目で一瞥してくる。どうしてそんな目をするのか、僕には分からない。

「おはよう」

返事は無い。

「おはよう、佐綾」

返事は無い。代わりに彼女のため息が聞こえた。異常にそれが鼻について、僕は少し語気を荒げた。

「おい、あいさつくらい返せよ」

それでも妹は僕を拒絶するように目を逸らすばかりだった。僕は訳が分からなくて、もう何も言えずに立ち尽くすばかりだった。彼女が口を開いたのは、トーストを二度、三度口にしてからだった。

「食欲失せた」

「え？」

「本当、あんた気味悪い」

「何が？」

僕は今まで通りじゃないか。

なのに、何故いきなり気味が悪いだなんて言うんだ。

全く佐綾にそういう言葉を投げかけられる原因が分からなくて、身に覚えがなくて、頭に浮かぶ言葉をひたすら口にして、それから立ち尽くして茫然自失とするばかりだった。

佐綾は言葉通りもう食べる気を無くしたトーストを皿の上に置く。食べかけのトーストがああ正四角形に見えて、何故か僕の胸中に黒いモノがうずめいた。

「お願い、もう学校では話しかけないで」

「佐綾」

「お願いします」

彼女は嫌みったらしく丁寧な口調でそう言うばかりだ。

ふざけるな。意味が分からないんだよ。

佐綾は皿を持ってキッチンへ向かった。僕は大きく息を吐いて、テーブルについて軽く頭を抱える。

僕が一体何をした。思い出せない。人から気味悪がられることをしたっていうなら、思い出せないというのはおかしいじゃないか。思い出せ、僕は何か佐綾に軽蔑されるだけのことをした。昨日はお互い話す時間が無かったからよく分からない。でも一昨日の佐綾はいつもと変わらなかった。何かあったとすれば、僕が何かしたとすれば昨日？

思い出せ、思い出せ、思い出せ。

気付けば、髪を掴み上げるように頭を抱える僕がいた。こういう大事なことを思い出せないというのは、吐き気を覚えるほど気持ちが悪いのらしい。自分の記憶力に絶対の自信があるわけではないのだけれど、それにしてもこれはおかしいじゃないか。

佐綾はもう居なかった。いつの間に出て行ったのか、開け放たれたリビングのドアが風に揺られてきいきいと耳障りな音を立てている。風なんか吹いてないのに。

重い足取りで僕は家を出た。

空を見上げると眩しすぎる太陽があつて、その光を掌で遮った。

この心地よい陽光は、もう冬の終わりを意味していた。僕の肌の表皮は春の訪れを確かに感じ取っているのだけれど、しかしこの底冷えするようなこの寒気は抑えられなかった。家を出てからずっと、あの白い箱が頭を離れてくれなかった。

頭はずっと重いままだし、吐き気もある。延々と続く眠気はいつものことだ。風邪を引いているのかもしれない。

僕は口を押さえることで吐き気から逃れた。やっぱり今日は学校は休もうか。一日ゆっくり部屋で休めば風邪くらい治まるだろう。それに部屋にはあの白い箱がある。

「……」

白い箱がある、からなんだ。学校を休む理由の一つに箱があるからって何だ。僕は何を考えているんだろう。

今日の僕はおかしい。こんな状態で学校へなんか行くべきではないと思うんだけど、僕の足はそれでも学校へ向かつていた。僕の中である疑問が浮かぶ。僕の思い出せない範囲で、僕は佐綾から敬遠されていた。ならば学校ではどうだろう。僕が何かしたとすれば学校での可能性が高い、と思う。

校門を通り抜けて腕時計を確認すると、針は8時15分を指していた。どうやら間に合ったらしい。校内に入ると、すぐに顔を洗いにトイレに向かった。

蛇口をひねり、両手に池を作つて、それに顔を埋めた。水の温度は冬のそれを残していて、ひんやりとして僕の頭を少しだけ正常に戻す。

顔を上げると鏡があつた。濡れた僕の顔と前髪がそこに写ってい

る。ここ半年ほど寝不足に悩まされている僕の目元には、くつきりとクマが出来ていた。ふいに瞼の重さを思いだして、少し鬱々とした気分になる。

鏡の形は綺麗な正四角形だった。いや、よく見れば長方形にも見えるし、僕の霞む目には平行四辺形にも見えなくはなかったけど、やっぱりそれは正四角形だった。

じんわりとまた頭が熱くなる感覚があった。

それと同時に感じる、何かの気配。気配といってもそれは極めて微細なもので、本当に何かの気配を感じたのかと問われると、即座に返答しかねるくらいの微妙なものだった。しかもそれは一瞬で、怪訝に辺りに気を配ってみても、再びその気配を感じ取ることはできなかった。

特にそれについて深く考えもしなかった僕は、もうすぐHRが始まることを思いだして、ハンカチで顔を拭きながら急いでトイレを出た。

廊下まで聞こえてくる、教室内の騒ぎ声。しかしそれは僕が扉を開けて入ると同時に静まりかえった。僕の戸惑いをよそに向けられる、好奇と蔑みが折り混ざったような視線。

やはり、昨日僕は何かしたのか。僕は思い出すことすら諦めて自分の席に座った。鞆から教科書を出し机に押し込んだ。すると、僕の手には奇妙な感触が残った。ぬちゃりと粘っていて、机から手を出す、それは糸を引いて僕の指に絡みついた。

その残骸から察すると、何らかの虫の死骸だった。吃驚した声を少し漏らして、慌てて粘り着くそれを机から引き出した。

ごっそりと、潰された虫の死骸がビニール袋に詰められていた。全身に鳥肌が立ち、僕はまた小さく叫び声を上げた。

「人殺し」

誰かがそう言った。僕に言った？

顔を上げて周りを見ると、誰もが僕から目を逸らしていた。

何なんだ。何なんだよ。

僕の知らない所で何か起きている、そう思いたいけどそれは語弊がある。どうやらその何らかの当事者は僕自身で、単に僕が覚えていないだけなのだから。

さらに僕は深刻なことに気付く。思い出せないのはその昨日の出来事だけじゃなく、昨日の記憶全てであった。昨日、僕がどこにいて、何があつて、そして何をしたのかさえ思い出せない。ダメだ。考えるとまた頭の奥が熱くなる。

僕はビニール袋を片付け、再びトイレで手を洗った。教室に戻ると既に担当がHRを始めていて、扉を開けた僕を見た。

「早く席に着け、そこのお前」

名前すら呼んでももらえなくなっただけらしい。

教鞭を執る数学教師は、僕の目には虚ろに映る。流石に眠気も限界だった。前の席の辺田彩子は気持ちよさそうにうたた寝している。僕もいつそ寝てしまおうか、僕はちらりと教師に視線を送る。教師はチョークで黒板を叩き、公式の説明に躍起になっていた。

教師が手にした教科書はA4サイズのもので、表紙には様々な図形が描かれていて、その中には正方形もあった。白い正方形だった。はっとして自分の教科書の表紙を見ると、それにも白い正方形は描かれていた。

教師の肩に何か小さいものが乗っていた。それは人のように見えるが、どうも僕の目には曖昧なものに映るのだ。卵のようにつるつるとした白く丸い頭で、ぼんやり半透明な身体は、後ろの黒板の文字が透けていた。男か女かも分からない。そいつには目が四つあった。通常、人間にある両目の上にもう目玉が二つ。しかし存在がとにかく希薄だ。一見不気味な容姿なのに、存在が薄過ぎるせいで不気味な雰囲気すら掴めない。教師もその存在に気付いていないのか、一心不乱に黒板に文字を走らせ続けている。

僕は目をこすり、一つ欠伸をした。閉じそうになる瞼をギリギリ開いて頬杖をつき、その希薄な存在に集中した。ところが集中してみてもその存在の形状や色をしつかりと把握できないのだ。

その存在は僕を見ているような気がした。四つの目は僕をじっとりと捉えている。瞬間、段々そいつがはつきり視認できてきていた。すうっと身体の線が浮き上がり身体の線もはつきりしてくる。教師が違和感に気付いたのか、ふと肩に触れてみる。教師の手はその存在をすり抜けた。教師は首を傾げたが、大して気にも留めていないのか、そのまま授業を再開した。

存在はやがてはつきりと僕の目に映るようになった。存在は教師

の肩に三角座りで乗っていた。座った状態で高さがおよそ20cmほどだろうか。全身真っ白で陶器のように凹凸もない身体で、服も着ていない。四つの目を線で結ぶと正方形になるんだと思う。目玉のそれぞれが等間隔で並んでいた。よく見ると口もある。唇らしきものはない。

存在は口を開いた。ぱりぱりと白い和紙のような皮が破れて開いた。まん丸と開いた口の奥に舌はなくて、底なし沼のような暗闇がただただぼっかりと開いているだけだった。

「ハコ」

存在はそう小さく言った。抑揚もない貧相な声だった。すぐに忘れてしまそうな特徴もない声。しかしそれは僕の耳に響き、じつくりと反響するように脳内に言葉だけを刻んだ。

それがどういう意味なのか、なんとなく僕は理解した。

その“ハコ”というのがそいつの名前らしい。

「起きろ、お前」

数学教師の声で、僕ははっとして目を開けていた。

僕は寝ていたのだろうか。しかしそれはおかしいことだった。僕は今まで起きていて、さっきの白い存在——ハコという名前でのだろうか——を見ていたのに。

顔を上げると教師が僕を見下ろしていて、周りの生徒たちは何か汚いものを見るように、一斉に僕へ目を向けていた。

「居眠りするんじゃない」

厳格そうな口調で教師は言う。僕は何も言えず、ただ頭を下げて謝罪の姿勢だけをしてみせた。周りの視線がなんとなく嫌で、それから授業中ずっと頭を下げていた。四角の机が僕の目に痛く映っているだけだった。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 6 \\
 & 1 \\
 & 2 \\
 & 5 \\
 \hline
 & 8 \\
 & 8 \\
 & 4 \\
 <
 \end{array}$$

次の国語の授業には出なかった。もう教室に居ることが僕にとっては苦痛でしかなかったから、今は誰も居ない場所に行きたくて屋上に向かった。

屋上には佐綾が居た。屋上に設置されていたベンチで文庫本を読んでいる、扉を開ける僕に気付いたようだった。佐綾は僕を振り返り、眉間に皺を寄せた。

屋上は他には誰も居ない。当たり前だ、今は授業中なのだから。では何故佐綾は此处にいるのだろう。僕は扉のドアノブを握ったまま、ぼうつと佐綾を見ている。でも黙ったまま睨みあうのは気まずかったから、僕は軽く声をかけた。

「佐綾もサボリ？」

とりあえずそう言ってみたのだが、佐綾は目を逸らして小声で何か呟き、再び本に視線を戻した。

「なあ、教えてくれ佐綾」

縋るような情けない声色で僕は言った。僕はもう限界だった。

今日の朝、あの白い箱を見てから今に至るまで、僕にはある異変に気付いていた。他人から突然蔑まれることも、ハコというあの半透明な意味の分からない存在もそうだが、段々僕から記憶が削ぎ落とされていつているようなのだ。しかも、都合の悪いものと思われる記憶から徐々に消えていくらしい。僕の人生に何か大きな過ちがあったはずだと思い出そうとすると、不思議とそういう気がするだけで、脳内にはそれらしき記憶がない。

ない、のだけれど。僕には大きくその予感や胸騒ぎだけが残っていた。僕はそれを感じる度に頭や腕を掻き毟るしかなかった。僕はみみず腫れだらけの左腕を伸ばして、佐綾に近づいた。

「僕は何をした。黙りはもうやめてくれ。僕を、助けてくれ」

佐綾なら、ずっとこれまで双子として共に過ごしてきた佐綾なら、僕の全てを知ってるはずだった。

佐綾は怯えたような目をした。本を閉じベンチから立ち上がって後ずさりをする。

「嫌、やめて。来ないで」

何故だ。何故そういう目で僕を見る。今まで優しい妹だったじゃないか。兄である僕を慕い、時に僕が間違ったことをすれば叱咤をしてくれて、僕のために涙を流してくれて、そんな妹だったじゃないか。

ところが、どうだ。今日の朝からこうだ。あの教師やクラスメイトと同じ、蔑んだような目で僕を見ってくる。佐綾はやがて後ろのフエンスに追いやられ、嫌悪感を込めた目で僕を拒んだ。

僕は全身の血がだんだん頭に巡ってくるのが分かった。

「……意味分かんないんだよ！」

僕は佐綾の肩を掴み、激しく揺さぶった。佐綾の小さな悲鳴が耳障りだった。

「教えるよ！ 僕が！ 何をしたのか！」

僕は目を剥いて、激怒するような、懇願するような、今にも泣き出しそうな、そんな雄叫びで訴えかけた。感情が、爆発した。

佐綾は怖じけたような目を敵意に変え、僕を睨みすぎる。

「——や、めてっ！」

佐綾は渾身の力をもって僕を突き飛ばした。僕は無様に地面に転がり、ベンチの角に頭をぶつけた。先程まで佐綾が手にしていた文庫本は僕の目下に落ちていた。

「あんた、本当に覚えてないの……？」

肩で息をしながら、佐綾は言った。

ただし、その声は僕の右耳へしか届かなかった。左耳に触れてみると、ぬめった液体の感触を掴んだ。手のひらを見ると血がべったりと付いていて、どうやら耳を打ったらしいことに気付く。耳の奥でドクドクと血管が脈を打ち、激痛を伴う。鼓膜が破れている。片

方が全く聞こえない。

左耳から滴る僕の血が、文庫本の青いカバーに滴り落ちる。

「……どうかしてる。言い逃れもここまで来たら逆に笑えてくるわ」  
佐綾が吐き捨てるように言う。

彼女はそれから罵詈雑言の限り僕を罵ってきたようだが、もはや僕にはどうでもよかった。食い入るように文庫本を見つめていた。本の四角い形を眺めているだけで、現実を忘れられた。過去の優しかったあの佐綾が、四角形を通して僕の目に映っている気がした。そうしていたら、またあの半透明な存在の気配を感じた。僕は顔を上げた。ベンチの上に、ハコが座っていた。ハコは僕を四つの目で静かに見下ろしていた。身体が依然と比べて少し大きくなっている気がする。40cmか、そこら。少なくともあの数学教師の肩に乗るような大きさではなかった。

ハコの目は、よく見れば僕の目にそっくりだった。虚ろな目。生気のない目。覇気のない目。常に視点の定まらない揺らいだ目。それでも僕だけを見ようと、僕をなんとかしてあげたいという意志が込められているように見えるのだ。

そうか、わかった。お前が僕を救ってくれる唯一の理解者なのか。君が僕が助けてくれるのか。

「助けて、ハコ」

ハコはじつと僕を見つめるばかりだった。表情に悲哀がさした気がした。僕は手を伸ばし、震えるような声で懇願する。

「何か言ってくれよハコ。僕を助けて、僕は、何かしたの？」

ハコは数秒の沈黙のあと、皮の垂れ下がった口をぽっかりと開けた。ハコの口の中の暗闇を魅入られたまま、僕はハコの言葉を待つ。しかし、

「死んじゃえばいいのに」

ハコの口から発せられた声は、どうしてか佐綾のものだった。

気付くと、僕は屋上に一人つきりだった。

とつくにハコの姿はなく、そして佐綾も居なかった。僕の傍にあった文庫本もない。佐綾が持っていたのだろうか。

僕は左耳に残る痛みに耐えながら立ち上がった。空は青みがかった夕暮れで、長い間ここにへたり込んでいたことを僕に教える。

僕は保健室に向かった。保健室には誰もおらず、保健の先生が居ないのに部屋が開いているのは不思議だった。勝手に棚からガーゼと消毒剤を取り出し、適当に耳の穴にぶちまける。じわじわと広がる染みるような痛みに呻く。僕はテープとガーゼで耳を覆い、保健室を出た。

廊下を歩いていくが、誰一人として生徒とすれ違わない。みんなもう帰ったのか、部活にでも行っているのだろう。長い廊下に、窓から青白い夕暮れが差す。落ち着く色調で、少なくとも僕にとって昼間の喧噪に包まれた廊下よりは幾分心が安らいた。

下駄箱に着くと、一つの人影があった。大分暗くなってきたので、それが誰なのかは分からない。さして気にも止めず自分の下駄箱へ向かおうとする僕だったが、どうもその影が僕を見ているらしいことを悟った。

「何？」

僕は細々とした声で影に問いかけた。影は少しの間をもつて僕の方へと近づいてくる。やがてそいつの顔が夕暮れに照らされた。僕より一回り背の高い男子生徒だった。しかも知らない顔。

「……誰？」

「君川ってんだ。お前は俺のことを知らないかもしれないけど、俺はお前のことをよく知ってる」

君川という男子生徒は皮肉を込めるような口調で僕を見据えた。

僕は彼から放たれる不穏な空気をひしひしと感じて、一步後ずさる。

「何か用」

「とりあえず殴らせろ」

「は？」

宣言通り、僕は次の瞬間彼に殴られていた。尻餅をついて、僕は君川を見上げた。彼は鬼のような形相で僕を見下ろす。唾を飲み込むと血の味がした。

今日は本当に訳の分からないことばかり次々と起こる。殴られる理由すら身に覚えがなくて、僕には彼が気が狂っているのではないかとしか思えなかった。

「お前が彼女を消した」

そんな事を口にして君川は僕に馬乗りになり、拳を二、三度振り下ろした。僕は辛うじて顔を手や腕で覆ったが、それでも容赦なく拳は落ちてきた。

「彼女は俺の全てだった。彼女は俺の世界で、彼女は俺の生き甲斐だったんだ。なのに、お前が彼女を消したんだ」

彼女？ 消した？ 意味が分からない。

こいつは一体、何を言っているのだろう。何か反論を返したかったが、彼の攻撃から必死に抵抗するだけで精一杯な僕にそれは許されなかった。

やがて君川は僕の首に手をかけ、強く締め上げ始める。

「言え！ 彼女をどこへやった、この愚図野郎！」

彼が興奮して叫ぶたびに手にかかる力は強まり、僕の視界はすぐに白みかけた。息が出来なくて苦しいというよりは、頭に血が巡ってこないような気持ちの悪いぞわぞわした恐怖が全身を浸食してきてた。

何故だ。僕は自分が何をしたのかも理解できないまま、こんな仕打ちを受けなければならぬのだろう。記憶の削ぎ落とされた走馬燈が見えてきて、僕は目を瞑った。ふいに、玄関の方から声が上がる。

「やめて君川くん！」

薄れる意識の中で聞こえてきたのは、意外にも佐綾の声だった。ずっと君川の指の圧力が弱まって、僕は大きく肺から息を吐き出し、そして大きく空気を吸い込んだ。

佐綾は玄関で悲しげに顔を歪めて僕らを見ていた。君川がはっと顔を上げ、前を見る。そして目を伏せ、首を横に振った。

「くそっ……」

君川は悔しそうに悪態を吐きながら立ち上がり、靴を履いて玄関へと歩いていく。僕は血の味のする咳を出しながら彼の背中を見た。君川は佐綾の横を通り過ぎると、ぽつりと呟いた。すごく小さいはずだったその呟きは、どうしてか僕の耳に痛いくらいに届いた。

「……絶対に許さねえ。彼女の代わりに、今度はお前を殺してやる」  
本当に、何もかも分からなかった。

佐綾は僕の2、3m前をゆっくり歩く。

学校を出てから僕らはずっと無言で歩いていた。本当は気まずくて佐綾と一緒に帰りたくはなかったのだけれど、同じ家に住んでいるのだから仕方ないし、僕もすぐに家に帰りたいかった。

陽は落ち、春先とはいえ肌寒さを感じた。街灯に照らされてはまた暗闇に消え、また照らされては消える佐綾の儚げな背中を眺めた。  
『人殺し』

クラスメイトの誰かが言った言葉が頭の中で繰り返される。

『殺してやる』

君川の言葉が頭の中で繰り返される。僕はそれらを繰り返す度に胸を焼かれるような気持ちになった。過去の記憶に靄がかかる僕にとっては理不尽な話なのだが、それは単に僕の記憶力の問題なのか、少なくともこれは彼らにとっては理不尽でもなんでもない扱いなのだろう。ふと、今朝覚えた吐き気が蘇り、僕は口を抑えた。

骨董品店のショーウインドウのガラスに僕の姿が映る。今朝トイレで見たときよりも酷い顔をしていた。結局朝から何も口にしていない僕の頬は惨めなくらいに瘦けている。クマだってガラス越しでもくつきりしてきているのが分かる。こんなの、初対面の人が見たって“気味が悪い”と言うだろう。

「君川くんはね」

前を歩く佐綾が静かに言う。

「この世で最も大切な人をあんなに消された」

「それはあいつから聞いたよ。僕がどこかへ消した」

「“どこかへ”？　いつまでしらを切るの。あんなに君川くん、その子に会いたがってるんだよ。その子だってきつと君川くんに会いたがっている」

「どうしてその子のことなんか分かるんだ、佐綾は」

「あの子のことなら私が一番よく知ってる。君川くんをこの世のどんなものより好きだってことは、他の誰よりも知ってる」

僕は佐綾や君川の言う“あの子”という人物も知らない。僕が殺したんじゃないかとか、僕がその子を消したんだとか、僕自身には本当に身に覚えがない。というか、自分の持てる限りの記憶に無い。みんな僕がやったことのように決定付けるけど、本当にそんな証拠があるのか。

「本当に覚えてない。記憶にないんだ、僕には」

僕の言葉を聞くと、佐綾は深々とため息を吐いた。

「……気味悪いわ、あんた」

僕にとって本当に気味が悪いのは、お前らだ。

家につくと僕は自分の部屋に入った。

明かりを付けて、すぐに部屋に鍵をかけた。部屋には今朝と同じように白い箱があった。1m四方の正六面体。その上にはハコがいた。いつものように三角座りで、四つの目で部屋に入る僕を見つめていた。僕はベッドに鞆を投げ出し、ハコを見据えるように正面に座った。一度胡座で座ってみたが、ハコの真似をして三角座りで座ってみる。

ハコは口を結んだまま無言で僕を見下ろしていたし、僕も何も言わなかった。

代わりに今日の出来事を全て頭の中で反芻させた。何度思いだして不可解なことだらけで、僕には気持ちの悪くなるような内容ばかりだった。でも僕は今日の出来事をよく噛みしめていないと、明日には今日のことを忘れてしまいそうで怖かった。

自分にとって都合の悪い記憶が無くなっていく。それは今日一日でかなり進んでいた。残っているのは楽しかった過去の記憶ばかり。優しかった妹と、楽しかったクラス、ユーモア溢れる教師、充実した生活。

そつえば、いつから僕は眠れなくなっただっけ。いつから不

眠症に悩まされているんだっけ。それさえも思い出せなくなっていた。残った楽しかった記憶さえも、もはや苦痛で不気味なものでしかなかった。分からない、どうしても思い出せない、どうしても、こんなことに。

一番不可解だったのは、この白い箱と、今僕を見つめ続けるハコの存在だった。ハコの出現は一体僕に何を教えようとしているのだろう。

突然軽い眠気が襲ってくる。しかし僕はこの眠気から耐えようと思った。寝てしまえば今までのことを忘れてしまいそうだったからだ。

耳の奥が脈打ち、そのじわじわとした痛みで僕は目を開けた。

慌てて壁時計を見る。七時三十二分。どうやら二十分ほど寝てしまっていたらしい。試しに起きる前までの記憶を辿ってみて、安堵する。昨日の記憶はちゃんとある。

白い箱の上を見ると、あの半透明な奇妙な存在は居なかった。

カーテンを開けると朝の日光が僕の眼球を刺激した。一階から物音が聞こえる。佐綾はもう起きているらしい。

昨日と同じように部屋に鍵をして一階へ降りる。佐綾は昨日と同じようにトーストを食べていて、今度は僕の方すら見なかった。昨日は結局何も食べなかったが、おかしなことに全く腹は減っていない。妹と挨拶すら交わさず、僕は玄関へ向かった。

玄関を開けると、すぐ正面に君川が立っていた。君川はマネキンよりもずっと曖昧で無機質な表情で僕を見ていた。

目をこすり、瞼を閉じて痛いくらいに上から指で押してみた。そして、そっと目を開けてみる。

君川は居なかった。

錯覚だったらしい。

クラスでは相変わらず好奇と嫌悪の視線と向けられ、教師からは相変わらずぞんざいな扱いを受けた。

授業中ずっと居眠りをしていた辺田彩子は、休み時間になると起きて缶の筆箱を開け、蓋の裏面に貼られたプリクラをしげしげと眺め始めた。プリクラの一つに爪を立て、ペリペリと剥がしていく。一つ、また一つと剥がす。僕はそれをぼんやりと眺めていた。蓋を閉じると、缶筆箱の柄は白黒のタイル柄だった。いくつもの正方形が僕を見ている気がして、僕はどきりとする。

辺田彩子は僕の方を振り返り、にっこりと笑った。

「あげる。これを閉じ込めていいのは君だけなんだよね」

彼女は僕の机の上に、いくつかの丸められたプリクラを置いた。「箱が好きなんだね。君の感心があるもの、いつも観察してるから分かってるよ」

彩子はそんなことを言う。クラスメイトに普通に話しかけられたこと以上に、このような意味深な発言をすることに驚いた。僕は警戒し、言葉を選ぶ。

「どうして……」

「どうして？ どうしてそんなこと分かって？ それは簡単なことだよ。私も箱が好きだから」

辺田彩子は、僕の挙動を観察するような眼差しで見つめてくる。僕にある記憶を辿る限り、彼女が箱好きだというのは初耳だ。

「箱に物を入れるとね、ああ、これは私の物なんだって実感できるの。自分の箱に入れておくとすごく安心できる。独占欲とか支配欲とか、そういうのが満たされるの。ちゃんと蓋をしておけばどこかに転がっていたりしないし、失くしたりしない。君なら分かるよね、この箱の魅力」

彼女は身を乗り出しそんな勢いで目を見開く。

「それとね、もう一つ。箱にはとっておきの魅力があるの。何だか分かる？」

どうして辺田彩子はこのことを僕に語り出すのだろう。その意図を掴めないまま、僕は首を横に振った。クラスメイトたちが奇異の視線を僕らに浴びせてくるのが分かった。

「他人の箱は、開けるまで中身が分からないってこと」

辺田彩子は僕の目を覗き込み、不自然な笑みを作る。

僕は敢えて何も言わず、次の授業が始まるまですっと彼女の目を見返した。

先生が授業に入ってくると、辺田彩子は僕にしか聞こえない声で言う。

「明日、君の家に行くね」

僕は無言の返事を返した。彼女が何を言いたいのか全く読めない。授業が始まると、辺田彩子はすぐ机に突っ伏した。また居眠りするつもりなのだろう。

僕は教科書も出さずに丸められたプリクラを見つめていた。捨てようとも思ったが、僕は気になってその一つを手取る。

広げてみると、そこにはこちらへ笑顔を向ける二人写っていた。

辺田彩子と、もう一人。それは紛れもなく僕の知る人物だった。

辺田彩子の言葉と、このプリクラの意味。それが僕には全く理解できない。僕はそつとそのプリクラをポケットに入れる。

彼女は一体何なのだろう。

放課後になると、僕はすぐに帰り支度して教室を出た。下駄箱へ向かう途中、佐綾のクラスを通りかかった。教室を出る佐綾と偶然鉢合う。佐綾は僕に気付くと、すぐに視線を逸らした。

彼女は一人で教室を出てきた。社交が得意な佐綾は、いつもは友達と一緒になのに。

そつえば、と僕は昨日のことを思い出す。佐綾は授業中にも関わらず、屋上で一人で文庫本を読んでいた。帰るときだって、僕や

君川を見つけるまで佐綾は一人だったのだろう。

「あんたのせい」

と、佐綾は小さく言って下駄箱の方へ歩いていった。僕はすぐに理解した。佐綾は僕のせいで友達が居なくなつたとも言いたいのだろう。

僕は頭が痛くなつて、どうしようもない気持ちになつて、こめかみを抑えて息を吐いた。僕は自分の過去を知るのが、もう恐くて仕方なかった。

僕は校舎を出た。雨が降り始めていたが、僕は折りたたみ傘を取り出す気にもならなくて、雨に打たれる感覚を一身に受けていた。

振り返ると、僕がさっきまで居た校舎があつた。ふと、屋上に見える一つの影に気付いて僕は目を凝らす。そこにはハコが居た。雨だというのにハコの身体は濡れていないようで、雨がハコをすり抜けているように見える。ハコはじつと僕を見下ろす。どうしてだろうか、僕はハコが言いたいことが分かつたような気がした。

多分、ハコはこの校舎のことも箱であると言いたいのだ。

辺田彩子は気付いているのだろうか。箱が好きだと言い、何かを閉じ込める感覚を楽しむという彼女が、その実、彼女自身、どこかが日本人の誰しもが何かしらの箱に閉じ込められているということに。

僕は何故か叫びたい気持ちになつて、頭の中で何か切れるような感じがして、そして訳も分からない雄叫びを上げた。周りの生徒が一斉に僕に視線を集めたが、それでも僕は構わず叫び続けた。

——僕は所詮、誰かの箱の中だ。

僕は電車に乗り、街の方へと赴いた。

改札を出て、街道を闊歩する僕。街にはこれでもかというほどに箱が敷き詰められていた。大小様々な箱があつた。見渡す限りの四角、四角、四角。

何故今まで気がつかなかったのだろう。こんなにも日本は箱に溢れている。人は箱の中で生活し、箱から箱へと移動し、箱の中で活動するのだ。

どうして人は箱の中で生活するのだろうと考えると、それはやっぱり箱の中は安全だからだ。箱の中に居れば雨や風や雪にさらされず、野犬などの獣に襲われる危険もない。外部の人間との交流を断てる。事故にも巻き込まれないし、強盗や殺人鬼に遭遇する心配もない。そのために人間は日々箱の強度を高め、鍵を付け、セキュリティシステムを向上させた。

もはや箱なしでは僕らは生きられないのだ。箱は僕らを閉じ込める代償に、か弱い僕らを庇護してくれる。

ハコはどこにだって居た。風の吹き付けるビルの屋上、暗い路地の角、コンビニのベンチの上、薬局のマスコットの隣、自動販売機の裏、UFOキャッチャーの中。いつだってハコは、僕が発見する前から僕を四つの目で見つめ続けていた。

「そんなに閉じ込められたいのか、お前も」

ハコはいつも箱の近くに居て、ひたすら自己の存在をアピールしていた。

そうして街を探索していくうちに、だんだん視界が開けてきた気がした。街を見渡すと街の至るところにハコが居ることに気付いたのだ。その数は数十も数百も居て、一斉に僕へと視線を送っていた。僕は手を広げ、目を閉じた。

ハコはどこにだって居たのだ。

やがて日が暮れ、駅へと向かった。今更になって、ずっと雨が降っていたことを僕は思い出した。僕の服や身体はぐっしりと水を含んで、ぽつりぽつりとプラットホームに滴っていた。腕時計を見ると、驚くことにもう終電の時間だった。僕は時間を忘れて街を歩いていたらしい。ホームにも人はほとんど居なかった。無音が一帯を包んでいる。

僕は目を閉じ、柱に寄りかかって電車を待った。さっきまでは眠気など忘れ爛々と目を輝かせていたが、流石に眠気が復活してきたようだった。うつらうつらと頭を揺らす僕。電車が到着するまで、あと二十分はある。

雷の轟音が轟いた。雷光が僕の目を瞼の上から刺激する。うつすら目を開けて腕時計を確認すると、時計の針は電車が到着するまであと五分というところまで来ていた。ホームの電光掲示板を見上げると、最終電車の前に急行が通過するらしいことが分かった。

ふと、違和感というか、何か背後から空気で圧迫されるような感覚があった。事もなげに後ろを振り返る。

黒いレインコートを着た長身の男がすぐ背後に居た。目元はフードの影に隠れて見えず、口元だけを露出させている。その口は無機質に、無表情にとり作られていて。僕にはそれが誰なのか、何となくわかっていた。

「君川」

僕の言葉と同時に、再び雷光が辺りに閃いた。男の半開きに開かれた目がじつとりと僕を捉えているのが分かった。その目には一切の活力や生气はなく、目の下には寝不足の証があった。

君川は僕の肩を掴む。掴むその手に、彼の怒りが歪な力となって伝わってきて、僕は顔を歪めた。そのまま君川が押し出すように歩を進め、僕は一步一步後ろへ下がる。

『まもなく3番線に急行電車が通過いたします』

ホームに自動アナウンスの作業的な音声が流れる。その頃には僕はホームの端まで追い詰められていた。踵が端にかかり、僕は小さく声を上げた。

「……お願いだ」

君川の声は、錆びた弦を爪弾いたように弱々しく乾いていた。

「彼女に会わせてくれ。たとえどんな形でも、どんな姿でも構わない。それでも俺は最期に一目彼女の顔を見たいんだ。でないと……」

——俺は本当にお前を殺してしまう。

君川は痛嘆するように言った。僕はここにきてようやく理解した。自分置かれた状況。自分がこれからどうなるのかということ。

君川の腕を掴み抵抗を試みたが、体格上、彼に力で押し切るのは難しかった。

「言え。彼女をどこに隠した。言え！」

「知らないって言うてるだろ……」

ふいに警笛が鳴り響いた。君川ともみ合いながら、横目で電車が迫ってくるのが見えた。

「止めてくれ君川。殺さないで……」

電車が迫る。警笛が耳を劈く。ヘッドライトの灯りが目に痛い。力の抜け始めた足元。脳内を駆け巡るのは喜と楽とほんの少しの苦しみで塗り固められた不気味な走馬燈。そして叩きつけられる死の予感。

来る。来る。落とされる。轢かれる。死ぬ。殺される。殺される。

殺される。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。

ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。ああ。

「うわ、あ、ああああああ！」

突然、はっと目を見開く君川。叫んでいたのは彼だった。

「誰だお前え?!」

恐怖に顔を歪め、途端に力を緩める君川。僕は彼を引き剥がし、ホーム中央に逃れる。僕の方を指さし発狂し始める君川は、その場

にへたり込み、僕から逃げるようにそのまま後ずさる。

「ひっ」

短く叫び、君川はホームから落下した。慌てて君川は立ち上がり、ホームに掴まる。まだ上半身だけホームに出した状態。

電車はもう寸前だった。鼓膜を叩くような激しいブレーキ音。運転士の吃驚した顔が視界の端に映る。

「た、たすけ――」

やがて目の前を通過する鉄の塊。ホームと塊の間で吹き上がる血飛沫と細切れた肉片。こちらに目を向け、かっと目を開く君川。

「ぎいいい、いい、いいいい！」

擦れるような、千切れるような、そんな異音と君川の長い悲鳴。瞬きすらできなかった。目を閉じることすら許されず僕は君川の目を見ていて、また彼も畏怖の眼差しで僕を見ていた。一瞬の出来事は永遠のように流れていつて、僕の目に焼き付く。

電車は君川を通過して、10mほど先でようやく停車していた。

君川は挟み潰されながらもホームに掴まり、恐怖を怒りにかえ、僕を睨み殺さんばかりに見据える。口元からは血と泡が滝のように流れ出していた。線路上に大きなものが落ちる音がする。君川の下半身が千切れ落ちた音だろうか。

僕はただ震えながら息を荒げて君川を見下ろしていた。

「……俺は、ただ、彼女に会いたくて、それだけでよかったのに」  
君川はまた血を吐き出した。目から光が失われていき、君川は目を細めた。ホームに掴まっていた力が弱まり、遺言のように彼は唇を開く。

「――」

君川は最期に信じられない言葉を口にして、ゆっくりと暗闇に落ちていった。

君川の最期を見届けた僕は、真っ先に改札へと駆けだした。背後から誰かが追ってくるのが分かった。改札口を強行突破して、雨の中を全力疾走した。頭の中をちらつく肉片、血、言葉、目、顔。先程の光景全てが駆け巡っていた。

君川は僕を通して何を見ていたのだろう。あの目は人間を見る目ではなかった。まるで猛獣に襲われるような、恐ろしい化け物でも見たような、未知の生物とでも遭遇したような、そんな目を僕に向けてきたのだ。未だ醒めやらないこの全身の震えは君川の死を見たことなのか、それともあの言葉を耳にしまったからなのか。とにかく僕は一刻でも早く家に帰りたかった。

自宅まではここから二駅分ある。雨を肌で弾いて、じんと痛むこめかみを抑えた。坂道を駆け上がる。雨が、怒声が、全てが恐ろしかった。

気付くと僕は知らない道を走っていて、背後から聞こえていた声も消えていた。それでも僕は駆けつけた。立ち止まると心臓まで止まってしまう気がした。

家の電気は消えていて、いつそう僕の胸騒ぎを助長させる。佐綾は眠ってしまったのだろうか。だから電気が消えているのか。腕時計を見ると、時刻は深夜3時を指していた。

玄関を上がり、電気も付けずにまっすぐ佐綾の部屋に入った。

佐綾は居なかった。ひとまず、呼吸を整える。ベッドの布団をめくり、クローゼットを開け、佐綾を捜したが、彼女は見あたらなかった。

それでも諦めきれずに佐綾を捜していたが、ふいに部屋の電気がぱっと点灯した。ゆっくり後ろを振り返る僕。そこには怪訝に僕を見る佐綾が立っていた。

「……なにしてんの」

「佐綾。一体どこに行ってたんだよ……」

「どこって、ちょっとトイレ行ってただけよ」

何故だろうか、僕は佐綾まで居なくなってしまうのではないかと  
いう強迫観念に取り憑かれていたのだ。だが事実は違ったらしい。

佐綾は居る。僕は安堵の息を吐いた。

「出てっつてよ。これからまた寝るんだから」

「分かったよ、分かった。もう大丈夫。僕も部屋に戻る」

言って、僕はすぐに佐綾の部屋から出て行った。

自分の部屋に入ると、いつものように白い箱は部屋の中央に佇んでいた。ハコは僕の帰りを待ち侘びていたように僕を見つめていた。濡れた制服を放り投げ、寝間着に着替える。昨日と同じように床に座り、ハコと向かい合った。ハコの身長がまた少し伸びた気がする。箱の上に乗るのも幾分窮屈そうだった。

昨日と同じようにしばらく視線を交わしていたが、襲ってくる睡魔は昨日と比べものにならないくらい強かった。不思議なことに、もう君川の最期の映像は目の奥には流れなくなっていた。今日はぐっすりと眠れそうだった。

僕は目を閉じ、暗闇の中に落ちていった。

起きたときには7時近くを回っていた。久しぶりに数時間単位で眠れた気がする。腰を上げると、座ったまま寝ていたからかお尻が痛んだ。

リビングに降りると、佐綾が一人で朝食を取っていた。例の如く僕には一目もくれず、当たり前のように僕の分の朝食もなかった。佐綾は口を動かしながらひたすらテレビに目をやっている。

僕はトーストとコーヒーを用意して、佐綾と向かいあうようにテーブルについて、佐綾と同じようにテレビに目を向けた。そういえば今日は土曜日だ。このところ色々ありすぎて曜日感覚さえ失って

しまうところだ。

沈黙が10分ほど続いたほどだろうか、おもむろに佐綾が口を開いた。

「あんだ、昨日は夜遅くまで何してたの」

佐綾から普通に話題を提供してきたことが久しぶりのように感じた。

「別に。ちよつと隣町まで出掛けてただけだよ」

「ふうん」佐綾から話題を振ってきたのに、彼女の返事は素っ気ないものだった。「どうでもいいけど」

再び沈黙がリビングを包んだ。聞こえてくるのはお互いがコーヒーを啜る音と、テレビの中で原稿を読み上げるアナウンサーの声だけだった。ふいに、佐綾は顔をぴたりと止め、テレビの画面に視線を固定していた。怪訝に僕もそれに集中する。

『今日午前1時ごろ、高津駅で人身事故が発生しました』

ぞつと背筋が凍るような気分だった。

「高津駅って……隣町の駅じゃん」

独り言のようにぼつりと呟く佐綾。次のアナウンサーの言葉を聞いた佐綾は、その表情を凍り付かせた。

『——君川聡くんは、電車にはねられた直後、死亡しました』

画面に映る君川の顔写真。その写真は入学当初のものだろうか、希望に満ちあふれた快活な笑顔をしていた。

佐綾は唇を振るわせ、手にもっていたコーヒーカップを落とした。テーブルに焦げ茶色の染みが広がる。

頬から汗が伝う。突然、現実を叩きつけられたような感じだった。

僕は努めて平静を取り繕い、コーヒーカップを置いた。

テレビには駅の監視カメラの映像の一部が流れていた。僕と君川がもみ合うところから、君川が線路に落下するところまで。僕は目を凝らし、画面を凝視した。映像には僕の学校の制服を着た少年と黒いレインコートを着た君川が映っているのだが、僕の顔までうまく映ってはいないようだった。

ところが、何かがおかしかった。

制服を着た少年——つまり僕のことだ——の肌が異常なほどに色白だったように見えた。血色が薄いどころの話ではない。本物の僕だってあそこまで白い肌ではないし、むしろ平均ぐらい。あれじゃまるで……。

アナウンサーはそのことについては触れなかったが、この一連のトラブルの原因に僕の通う高校名を挙げていた。

「なに、これ……なんで、君川くんが……」

佐綾の目が潤み始めた。僕はここでまた違う不安を覚える。

——ピンポン。

突然、玄関のチャイムが鳴り、反射的に僕は身を震わせた。佐綾はそんなことを気にも留める余裕もないのか、わなわなと身体を震わせ下を向くばかりだった。

仕方なく僕は力の入らない腰を無理矢理上げ、玄関へ向かった。

その間に幾度か鳴るチャイム音。僕は恐る恐るドアノブに手を掛け、覗き込むようにゆっくりと開いた。

「よっ」

ドアの先には、片手を上げながら爽やかに微笑む辺田彩子が立っていた。

「何しに来たの」

少し辛辣な口調で言う僕。辺田彩子は口の端を歪める。

「昨日言ってたじゃん。君の家に行くつて。遊びに来たの」あつけ  
らかと辺田彩子は言う。「まあ……暴きにきたつて方が正解かな、  
この場合」

意味深に言う辺田。僕は意味が分からないという風に首を傾げた。  
「とりあえず上がるね」

図々しい。

辺田をリビングに通す。佐綾は辺田が入ってくるのに気付くと、  
涙を拭つて顔を逸らした。彼女を少し待たせて、僕はコーヒーでひ  
たひたになったテーブルをテッシュで拭く。辺田は難しそうな顔を  
してその光景を見ていた。

「お待たせ、そこ座つて」

「あ、うん」

座るよう促すと、辺田は逡巡したようにテーブルに着く。彼女は  
少し迷つて、佐綾の右隣に座った。

「コーヒーでいい？」

「お茶があればお茶がいいなあ」

辺田は頬杖をつきリモコンでテレビのチャンネルを変えながら言  
う。なんと図々しい。すると彼女は目だけで笑いながら僕の方を振  
り返る。

「今私のこと、図々しいつて思ったでしょ」

「まあ、正直」

「図々しくなきゃそうそう他人の箱開けるなんて大業はできないん  
だよ」

もはや言葉の意味を考えるのも面倒臭かったので、僕は何も返事

を返さずキッチンへ向かった。

辺田の分のお茶と、佐綾と僕の分のコーヒーを淹れ直し、僕は佐綾の正面に座った。左隣の辺田は、お茶を見て感嘆と声を漏らす。

「おっ、ジャスミン茶じゃん」

「クセの強いお茶だよ。苦手だった？」

「いやいや好物好物。中々センスいいよ、君」

有り難そうに手を合わせて湯飲みを傾ける辺田。佐綾はずっと彼女から視線を逸らして会話すら交わそうとしない。僕は途端に居心地が悪くなってテレビに視線を向けた。

テレビの上にはハコが座っていた。僕はハコの出現にさして驚いたり、反応を見せたりするようにはなくなっていた。ハコはいつでもどこにでもいることが分かったし、僕にとっては置物のようなものだ。ハコはテレビの上から僕らを見下ろし、これから起こることを見逃すまいとしているようだった。

僕は佐綾や辺田に悟られないようにちらりとハコを見ただけで、すぐに辺田を見据えた。

辺田は何の目的で我が家を訪れたのか。彼女の笑顔の裏に何か欺瞞があるのではないか。そして、昨日あの言葉。

『他人の箱は開けてみるまで分からない』

この言葉の含む意味は一体。

辺田は湯飲みを置き、テレビに目を向けたまま口を開く。

「君川くん、死んじやったね」

僕は身を固まらせた。動揺を悟られまいと努めて平静を装い、「そうだね」と答えた。

「そうだねって……何とも思わないの？ あの子の最愛だよ。あなたの“恋敵”が消えたのに——」

「恋敵？」

僕は意表をつかれたように声を上げた。ますます意味が分からなくなってきた。あの子と僕の関係は一体どういうものなのか。

「君川がぼくの恋敵だって？」

「あ、いやいや。恋敵つてのはあくまで比喻でさ。君がそうじゃないって言えばそれまでだけど。それでもあの子は君にとって大切な人でしょう?」

佐綾が不安げに僕らの顔を交互に見つめていた。僕は手を前に出し、ひとまず質問を断ち切りたいという意志を示す。

「ちよつと待つて。どこから説明したらいいのか。とにかく今の僕にはその質問には正確には答えられない」

「どういうこと?」

「なんとというか……僕には君川や辺田が指している“あの子”という人物がピンとこない。心当たりがないし、そもそも今の僕は……」  
そこで口ごもる僕。辺田は首を傾げて僕を見る。突然こんなことを言い出したのだからきつと彼女も不審に思っているかもしれない。皆が皆当たり前のように、僕と関わり深い人物だと言わんばかりに『あの子』と表現してくる。当人の僕がこんな風な発言をするのもおかしい話だ。

口を閉ざす僕を静かに見つめ、辺田は口を開いた。

「そっか。きつと君は箱に閉じ込めてるんだね」

「閉じ込める?」

「記憶だよ。それも自分にとって都合の悪いものばかり」

辺田の言葉は、不気味なくらいに的を射ていた。僕の感じている現象をぴたりと言い当ててみせたのだ。

「どうして、分かったんだ」

思わず僕はそう返していた。理解者を見つけたつもりでいたのだろうか、これではその通りだと言っているようなものだ。

「だから分かるってば。私も君と同じように箱が好きだから……うん。私も君と同じように、一度“ハコ”に魅入られているから」

僕は、辺田の言いたいことを一瞬掴めずに啞然とした。辺田はテレビの上のハコに視線を向け、「久しぶり」と言い放った。

ハコはすうつと首を動かし、確かに辺田を見た。それだけで辺田とハコの意味疎通が完了したのか、両者とも僕に目を向けた。

「そういうことだから」  
辺田は笑ってそう言った。

佐綾は一人、自分だけ話から取り残されたようにキョロキョロと僕らを見ていた。しかし彼女は必死に会話を聞き逃すまいとしているようだった。僕はそんな彼女の存在を思い出し、声を掛ける。

「佐綾、ちよつと席を外してくれないかな。あんまり面白い話にならないようだから」

「嫌」

佐綾は短くそう言う。その目は毅然としていて、何を言っても聞かないという風だった。辺田は何か不思議そうに僕らを見る。僕は諦めたようにため息を吐き、辺田との会話を続けた。

「ハコが見えるってことは、もしかして辺田も以前は僕のように？」

辺田は首を振る。

「いや、君のように記憶を削がれるってことはほとんど無かったよ。全くって言ったら嘘になるけどね。そもそも箱っていうのは自分の目の届かないように隠すっていう役割もあるから。臭いものには蓋を、ってやつ」

辺田はそこまで言って、頬杖を解き、膝の上に手を置いた。

「でもね、私は箱をそんな風に使ってほしくない。箱は大切なものを守るためにあるもの。それを傷つけないから箱があるんだよ」  
「待って」

僕は、辺田が責め立てようとするのを制した。

「僕には色々な記憶が欠落しているから定かではないんだけど、それでも僕が、みんなの言う“あの子”を消し去ったっていう証拠はあるの？」

「証拠はないよ。なんせ彼女自身が見つからないんだもの。でもみんな確信はしてるよ」

「どうして」

言い切る辺田の口調に、僕は語気を少し荒げてしまう。

「あの子と君の仲は、みんなあの子の話から知っているんだよ。最近うまくいっていないんだってね。さらに、君川くんっていう彼氏が出来てからは顕著だった」

辺田は続ける。

「君にとつて彼女は唯一、箱の外との繋がりがだったんだろうね。君は、君川くんに嫉妬していたんじゃないのかな。君川くんに彼女が奪われてしまうじゃないのか、そう思ったんじゃないの？ 箱の中でしか行動できない君は、ぶつけることのできない怒りを彼女に向けるしかなかった。事実、毎日あの子には生傷が耐えなかった」

辺田は、今の僕には理解し難いことを続ける。僕はじわじわと沸き上がる悪寒に苛まれた。消え去った記憶を抉られている。

「そしてある日、あの子が消えて、そしてあなたが学校にやってきた」

「ちょっと、待つて。そんな、それじゃまるで、僕があの子が消えるまで学校に来てなかったみたいじゃないか。僕は今まで普通に学校に通っていた。それが僕の残った確かな記憶だ。辺田のその話とじゃ、食い違いが……」

「食い違い？ じゃあ聞くけど、君は自分の記憶に絶対の自信があるわけ？ 残った記憶に、本当に確実性があると思うの？」

辺田が僕の目を逃がすまいというように捉える。

「それは……現に僕が過去を体験していることが証拠だ。他の誰にも証明できなくても、僕の覚えていること、そのとき感じたもの、見たもの、体感したものの、そういう過去の証拠が僕自身にはある」

「今はそんな哲学的な答えは求めてないよ。君が、例えば幻覚を見ていたんじゃないかって思うの。普通に学校に通っていたっていう幻覚」

「幻覚？ どうしてそんなもの見る必要があるんだ。辺田、君こそそんな根拠のないことを……」

「クマ」

そういつて辺田は僕の顔を指さした。

「クマが酷いよ。しばらく寝てないんじゃないの。幻覚を見てしまう要因は色々あるし、私も過去に見ていたわけだけど、君の場合、原因は寝不足にあるんじゃない？」

僕は何も言い返すことができなかった。幻覚を見ているなんて自覚はない。しかし、自覚がないからといって、ほんとうに見ていないと言い切れるのだろうか。

「君は幻覚を通して、自分のしたことから逃げているだけなんだよ。悪い事や都合の悪い記憶を箱に閉じ込めて、鍵をかけて。その反動でこぼれ落ちた記憶やありもしないものがたまに見えたりする」

額に汗が滲む。次々と受け入れがたい事実を叩きつけられているような気がして、心臓の鼓動すら耳に痛かった。

押し黙っていると、辺田は畳みかけるように続けた。

「じゃあ質問を変えるけど、最近鏡って見てる？」

突飛もない問いだった。戸惑いながら、僕は答える。

「鏡？ あんまり見てないけど、たまに目につくくらいかな」

「自分の顔、どんな感じだった？」

「どうって……」

一体何の質問だろう。僕は怪訝に思いながらも、学校のトイレや、学校の帰り道のショーウィンドウに写る自分の顔を思い出した。

「クマが酷くなっているな、とは。それ以外は普通だと思うけど」

「そう……」

顎に手を当て、考え込む辺田。彼女はハコに視線を移し、しばらくして手を合わせる。

「今から鏡を見てみよう」

辺田はジャスミン茶を飲み干し、席を立った。佐綾は何か狼狽したように状況を見守っていた。

「どうして。そんなもの見たって何か変わるわけでもあるまいし」

嫌がる僕の手を、辺田が掴む。

「変わるかもしれないんだよ、現実に気付き始めた今の君なら。君の箱を暴くにはそれしかない」

彼女は確信を持ったように言った。

横目にハコの姿を捉える。僕はハコに縋りたい気持ちだった。何か嫌な予感を感じ取っていた。これまで記憶が欠落してしまったと嘆いていた僕は、ここに来て過去を直視していくのが怖くなってしまうっている。

ハコが何か訴えるように、だらりと白い皮の垂れ下がった口を小さく開いた。何を言うのだろう。何か助言してくれるのだろうか。僕はハコの言葉を、藁にもすがる気持ちで待った。

ぞわり、と得体の知れない感覚が襲ってくる。ハコは開けた口を歪め、小さく不気味な笑顔を見せただけだった。

「……やめよう」

僕はかぶりを振って、辺田の手を振り払った。僕は震えていた。

辺田はそんな僕を静かに見下ろしていた。

「辺田は僕に何を望んでいるんだ。贖罪だろ？ “あの子”とかいうのに対しての」

「そうだね」

「なら、鏡を見ることに何の意味がある。辺田の意図は分からないけど、そんな回りくどいことをせずに、君たちが僕にそれ相応の罰を与えればいい。ただし僕は何も覚えてないから、君らが僕が何をしたのか教えてくれればいいんだ。それを聞いたら僕も納得して罰を受けられる」

僕は目を閉じ、痛いくらいにこめかみを押さえた。あの白い箱を見た朝から今までのことが、走馬燈のように駆け巡る。何も知らない僕をみんなは忌み嫌い、忌避しているというのに、僕には直接何も言ってくれない。真実を突き付けてくれない。佐綾は耐え難いことのように口を噤み、ただ僕を避ける。君川は怒りにまかせ、一方的な攻撃をぶつけてくる。

「そうだ。事実なんて、本当はないんじゃないのか。それなら合点がいく、だってみんな真実を語ろうとしないだろ。僕が何かしたなんてのは嘘。みんなが僕を陥れようとしているんだ。僕は嵌められているに違いない。なあ、そうなんだろ」

気付けば僕は弁明を始めていた。辺田も佐綾も何も言わずただ口を閉ざしたままだ。僕はそれが異様に鼻についた。

「答えるよ。 “あの子”なんて、本当はいないんだろ。 “あの子”ってのは僕を混乱させるための口実なんだろ。僕の記憶にはそんな奴いない。僕の記憶だって完全に無くなったわけじゃないぞ」僕はテーブルを叩いた。「 “あの子” は架空の人物なんだ！」

一気に喋った僕の息は乱れていて、肩を揺らして息をしていた。

辺田酷く冷静に口を開く。

「あの子はいる」辺田は訂正する。「……いたんだよ。君の記憶にだってちゃんとあるはず」

それ以上何も言わない辺田を、僕は鼻で笑った。

「そればかりだ。いた、いたって。そんな言葉に何の意味も証拠もない。いたっていうなら、言ってみろよ。僕に真実を教えてみろよ！」

佐綾は隣で怯えていた。それでも彼女がリビングを出て行かないのは、彼女も成り行きを最後まで見届ける義務が自分にもあると感じているからだろう。

辺田が息を吐いた。

「君は、いつまでそんな情けない台詞吐くつもりなのかな」

「何？」

「君はいつも他人任せなんだよ。真実を自ら直視しようとしてもしないで、いつだって嫌なことは箱に仕舞い込む。自分は被害者だって喚いていつまでも妄想の檻に浸かつてる。本当は知りたくないかないくせに。そんな人間に、そんな妄言野郎に、他人は本当の言葉はかけないものだよ」

辺田は諭すように言った。

「そんなに真実が知りたいなら、自分の目で見なさい」

僕は奥歯を噛みしめ彼女を睨み据えた。辺田は全く怯んだような様子はなく、むしろ親が子を叱りつけるような視線を上から浴びせてくるのだ。

「……五月蠅いんだよ」

僕は席を立ち、佐綾の肩を掴んだ。佐綾の怖じけたような声が上がる。

「鏡なんか必要ない。佐綾、どうだ。僕の姿はどう映る。普通だろ？ 気味が悪いなんてのは嘘だろ。僕はおかしくなんかない、正常だ」

「やめて——」

「佐綾！」

僕はうめき、佐綾の肩を離してテーブルに手を付いた。吐き気が蘇ってきて、うめき声を上げたまま口を押さえて目を閉じた。

僕は一体何を恐れている。僕の今見ている景色が壊されるわけでもないのに。ただ過去を知るだけなのに。過去はねじ曲げられない。ただ過去にあったことを現在に繋げるだけ。たったそれだけのことなのに。

「そんなに自分で知るのが怖いなら、ヒントをあげる」

立ち尽くしたままの辺田は、そんな僕を見下ろしたまま言った。

僕は顔を上げて辺田の顔を見た。その顔は何故か、哀れみのこもった目だった。

「——君は、さっきから誰と話しているの？」

「は……」

僕は意味が分からないという風に声を上げる。

「誰って……辺田と……」

「私と？」

あつ、と聞こえるか聞こえないかというくらい小さな声を僕は漏らした。前髪を掴み、テーブルの角を数秒見つめる。色んな情報が頭の中を回っていて、混乱してしまいそうだった。

何かを思い出し、僕はポケットを探った。ポケットの中には、あのとき辺田がくれた丸められた一枚のプリクラが入っていた。僕は震える手でゆつくりとそれを広げていく。

紙の上で楽しそうに笑う二人の少女。一人は辺田彩子。そしてもう一人。

『これを閉じ込めていいのは、君だけなんだよね』

辺田の言葉が反芻されて、次に君川の最後の姿が脳内をかすめた。この世の終わりを見たような目でホームにしがみつく君川。その口

が開かれる。

『……俺は、ただ、彼女に会いたくて、それだけでよかったのに』  
僕は全てを理解し——いや、あの君川の言葉を聞いたときから、  
もう理解していたのかもしれない——悲痛に叫んでいた。

リビングを見回す。もちろん、“あの子”はいなかった。

『——佐綾』

頭を抑えた。君川の言葉が反響し、それがすごく痛くて、頭が割れてしまいそうなくらいで、僕は必死に髪を掻き毟った。

そんな僕を見て、辺田はゆっくり目を閉じた。目の端から涙が伝っていた。

「佐綾は、もうここには居ないんだよ」

テーブルに置かれた佐綾のカップに注がれたコーヒーは、静かに波紋を揺らしていた。

僕はきつと、すごくやつれた顔をしていただろう。

辺田の視線と声を感じたが、僕にはまるで届いていなかった。

僕は家中を徘徊した。佐綾が居ないというのが未だに信じられなくて、家の中を探し歩いた。リビングを、キッチンを、玄関を、廊下を、仏間を、物入れを。そして、彼女の部屋を掻き回した。

佐綾の部屋は、何もかもが佐綾が居たときのままで、そのせいで僕はいつそう彼女が消えたことを受け入れることができなかった。

電気も付けずに中に入る。カーテンも閉め切ってあって、そこはまるで暗室のような。ベッドに触れてみる。冷たい。でも彼女の匂いだけは残っている。

視界の端に白くて細い足が映った。視線を少し上に持つてくると、ベッドの上にはハコが居た。ベッドに手をついたままの僕はハコと目を合わせる。ここまで至近距離でハコと目を合わせるのは初めてだ。

ハコは、やはり先程と同じように笑っていた。僕を嘲笑うかのようには笑っていた。僕は敵意をもってハコを睨んだ。

何が可笑しい。目でそう伝えた。ハコはそんな僕が面白いのか、さらに口元を歪めて笑った。口から垂れ下がる和紙のような皮がぷつりと切れて、僕の手の甲に落ちた。

「何が可笑しいんだ」

——可笑しいよ。佐綾が居ないと分かったときの君の狼狽した姿、すごく滑稽だった。

「君が佐綾を消したんだろう」

——僕だよ。でもその問いはおかしいな。佐綾を消したのは君で

もあるのだから。

「僕はそんなことはしない。佐綾は僕の唯一の肉親で、双子の妹だ。今までなんでも二人でやってきたし、考えも共有してきたし、いわば僕の分身みたいなものなんだ」

——あはは、はは。くすくす。

「笑うなってんだ」

——無茶言うなよ。笑い過ぎてお腹が痛いよ。

「だから、何がそんなに面白いんだ」

——佐綾は君の分身と言ったね。その考え方が危険なんだよ。

「どういうこと」

——いいかい、佐綾は君の分身ではない。ただの妹だ。

「そんなことはない。佐綾は僕の分身だ。……分身だった。少なくとも」

——少なくとも？

「少なくとも……」

——君川とかいう男が現れるまでは？

「……」

——分かった、分かった。つまり君はこう言いたいわけだ。小さい頃からずっと一緒にいて意志を共有していた佐綾が、君川という“毒”に犯されてしまった。それで彼女は変わってしまった。君川に二人の関係を崩されてしまい、一心同体同然だった二人の心が離れてしまったと。そういうことだね？

「まあ、そういうことだ」

——君は分かってないな。人間というものを分かっていない。まあ、君の場合は分からなくてもしかたないが、でも救いようがないね。

「なんだと」

——いいかい、まず君たちは異性だ。

「うん」

——佐綾は女の子なんだ。彼女だって年頃なんだから、恋くらい

するものさ。

「男とか女とか、恋することにそんなの関係ないだろ」

——まあ、それもそうか。男でも女でも恋はする。でも佐綾には恋を始める材料が君と違って揃っていた。彼女は毎日学校に通っていて、外の世界とのネットワークを広げることが得意だった。

「待てよ、学校に通うくらいだったら僕だって」

——君はほとんど家の中に居たんだ。辺田にもそう言われたばかりだろう。

「にわかには信じがたいけど」

——でも、事実だ。

「だからといって、君川という恋人が出来たからといって、僕に対する接し方がぞんざいになるのはどうかと思うんだ」

——そういえば、思い出してきているね。前までは君川なんて知らない風だったじゃないか。記憶が戻ってきているんだね。

「多少はね。どうでもいいだろ、今そんなことは」

——そうだな、話を戻そう。つまり君は、君川に佐綾というもう一つの自分を奪われた、と思っっているようだね。

「分かってるじゃないか。その通りだ。僕はそれが我慢ならなかった」

——それが可笑しいって言うてるんだよ。いいかい、奪われたって解釈がそもそも間違いないんだ。佐綾は君のものではない。もちろん君川のものでもない。人間が誰かの所有物だったり自らの分身だと主張するのは、とんでもない思い違いってことだ。

「そんなことは分かってる。たとえ親子でも縁を切れれば他人同然になる。たとえ親類だろうが夫婦だろうが、形式的には他人になることはできる。でもそれとこれとは違うんだ」

——違っつて、何がさ。

「これはそういう形式的なことじゃなくて、心の問題だから。たとえ絶縁したって、僕らの意志は共有されている筈だ。遠くにいたって相手のことが分かる。これが本当の一心同体なんだ。それを赤の

他人にねじ曲げられることが、僕は我慢ならなかったんだ」

——それで君は、彼女を閉じ込めた。箱に閉じ込めたんだ。

「そうだ。どこにも行かないように。誰の手にも僕の分身を渡さないように」

——そういえば辺田が以前言っていたな。箱に入ると、これは自分の物だと実感できるのだと。あれは伏線だった。やっぱり彼女は前から見抜いていたんだね。

「……」

——どうしたんだい、そんな気難しい顔をして。

「段々、君の言うことが理解できてきた気がする。つまり箱に入れてようやく自分の所有物だと実感できるということは、やはりそれは本当の一心同体ではなかったということだね。彼女を遠くに置くことが、実の所不安でならなかったから、僕は彼女を閉じ込めたんだ」

——それは二人が本当に通じ合っているとは言えない。佐綾はしだいに君の意志とは離れて、怖くなった君が彼女を閉じ込めた。そこには相手の意志など関係なく、ただ君の独占欲を満たしただけ。

「結局、僕のエゴだったわけだ」

——ちゃんと理解できているじゃないか。

「まあね。悔しいけど」

——さすが僕だ。

「さすが僕だつて……何故君なんだ。理解したのは僕だよ」

——僕は君だよ。君は僕。

「なに、いつてるの」

——そうだな、分身つてのが本当にあるとしたら、君の分身は僕なんだろうな。証拠に、こうしている今も僕らは意志を共有して会話している。

「そんな」

——信じられないなら、今すぐ自分の姿を見てみるといい。君の姿、僕にそっくりだ。

ふと、佐綾の部屋に明かりが灯った。ハコはもう居なかった。

振り返ると辺田が心配そうに僕を見ていた。なんと声をかければいいのか迷っているようだった。

僕は腰を上げ、彼女の隣を通り過ぎ、廊下に出る。彼女は黙ってそれに着いてきた。

廊下の先には洗面所がある。洗面所には胸から上ほどを映せる鏡があった。僕は何の躊躇もなくその前に立つ。辺田が息を呑んだ。

「はは」

乾いた笑いが喉から漏れる。

僕の顔は、ハコそっくりだった。

いくらずつと家にこもっていたからって、こんな肌にはならないだろうというくらいに病的な白さだ。髪も白くて、短髪で、遠目には肌と同化して見えるだろう。瞳の虹彩は血のような淡紅色。白い肌の上には所々斑模様のように日焼けの跡があった。僕はきつと日光に弱いらしい。そういえばあの朝、異様に日光が眩しかった気がする。吐き気を催すほどに。

額に張り付いた特別大きい二つの斑点は、目玉のような形をしていた。鏡越しに、その二つの目玉はじろりとこちらを見ているようだった。僕もハコと同じように、四つ目だったんだな、そう思っただけに心の中で否定する。ハコと同じようにではなく、ハコは僕の分身なのだ。ハコは僕で、僕がハコだったのだ。

「先天性白皮症」

辺田が横で言った。

「君は生まれつき日の光に弱くて、外に出ることもままならなかった。学校へ行くのも控えざるを得なかったんだよ」

「ああ、分かっている。よく分かっているよ。これが、本当の僕なんだ」  
しばらくこのままにさせてくれ。僕がそう言っていると、辺田は黙って

僕を見守ってくれていた。

どうしてか、目頭が熱くて仕方がなかった。

> i 6 5 7 7 — 8 8 4 <

ポケットから鍵を取り出し、正面を見据える。僕の部屋のドアがあった。

眠気がピークに達しているのか、ドアに掛けられた僕の名前のプレートが霞んで見えた。中学生の頃、佐綾の作ったものだった。不慣れに塗られた漆が所々剥がれている。

「君の箱」

後ろで辺田が言う。僕は小さく頷いた。僕の箱だ。色んなことを想像して、外のような出来事を想像してきた僕の箱だ。僕の世界の大半はここで作られてきたのだ。

他人を箱に入れた途端、多分僕の世界はまた一つ崩壊するのだろうけど、それでも構わなかった。これ以上、妄想に妄想を重ねて閉じこもっているわけにはいかなかった。

鍵を鍵穴に差し込む。手の震えはもう収まっていたが、回す鍵の重みに驚いた。まだ恐れているのかもしれない。僕は息を吐き、思い切ってドアを開けた。

ドアを開けると、いつものようにあの白い箱が部屋の真ん中を占拠していた。しかし、いつもその上に居るはずだったハコがない。ハコが居ないこと意外、いつもと同じ、僕の部屋だった。

ハコが居ないことだけが僕に違和感を与える。だがこれから先、僕はハコなんてあるはずもない不透明な存在を見ることがなどないのだ。

辺田は即座に鼻と口元を抑えて俯いた。

僕は白い箱に歩み寄る。

あの朝と同じだった。箱は一メートル四方で、傷一つない見事な真っ平らの面を晒している。そして牛乳よりも絵の具よりも濃い白滑らかな肌触り。吸い込まれそうになるのを頭を振って振り払った。もう僕は惑わされてはいけないのだ。強く自分にそう念じ、目を

見開く。

すると、箱の上の面に何かを発見した。縦に真っ直ぐ引かれた窪みがそこにはあった。迷わず僕はそこに手を掛ける。あそこまで開けるのに苦戦した白い箱が、どうしてか今は開くような気がしたからだ。

ベリベリ、とそんな音が聞こえてた。見ると、箱が少しだけ開いていたのだ。その隙間には暗闇が静かに口を開いていた。

この暗闇を僕は今まで恐れていたのだ。僕は暗闇にずっと閉じ込められていたから、外の明るい世界に思いを馳せていたのだ。そして僕の意識は完全に外の世界を作り出し、外の世界で暮らし始めていた。本当は最初から内の世界に居たにも関わらず。

僕はこの暗闇に打ち勝つ必要があった。いつまでも暗闇を恐れていては僕はいつまでも閉じこもったままだ。

手に更に力をかけ、一気に箱を開いた。

息を呑む音が聞こえた。後ろで辺田が顔を手で覆い、蹲っていた。最初に僕に感覚を与えたのは、鼻からだった。異臭が鼻孔をついた。腐臭とも言うものかもしれない。生ゴミにアンモニアをかき混ぜたような、そんな強烈な臭い。

箱の中には佐綾がいた。間接も逆に曲がり、身体を無理矢理捻られて箱に押し込められていたため顔は確認出来なかったが、間違いなくこれは佐綾だと僕には分かった。こんな状態でも、佐綾の肌は生前のまま――。

ふと見ると、僕の指に小さな虫が伝っていた。オオヒラタシテムシ。死体の掃除屋。手にとって潰して見ると、あのとき僕の机に入っていた虫の死骸そっくりだった。

何でこんなところに？

手元を再度よく見る。箱の姿が変わっていた。箱はただの段ボールだった。血と汗とよく分からない液体でふやけている。白い箱は、どうやら本当は白い箱ではなく、僕の霞んでいた視界に誤魔化されていただけだったようだ。

佐綾の肌は生前のままなんかじゃなかった。蛆が集り、蠅が飛び交い、佐綾の死体を捕食していた。彼女の肌は変色し、少し膨れ上がっていた。

その瞬間、僕の中に様々な情報が流れ込んできたのだ。それは過去の記憶だった。僕が今まで構築してきた虚構の記憶を押し付け、それが一気に押し込まれてくる。

今まで感じたことのないほどの頭痛だった。脳に直接針を突き刺されているような痛み、僕は跪いて頭を抱えた。僕は、ようやく気付いたのだ。

——僕に残ったのは楽しくて素敵な場面の記憶だけだったと思っていたけど、本当は楽しかった記憶なんて一つもなかったんだ。

僕はずっと部屋に閉じこもっていて、閉じこもらざるを得なくて佐綾だけが外の世界との繋がりがりだった。佐綾はそんな僕に優しく接してくれて、家に帰ると学校であつた楽しかった出来事を僕に語ってくれるのだ。

そんな彼女に感謝していたが、実の所怨んでいたのも事実だった。佐綾は楽しくて面白かった出来事を語ってくれるが、本当は僕を可哀想に思っているだけで、そんな僕に気を使ってくれているだけなんじゃないか。単に、僕を哀れんでいるだけだろう。やがてその疑心が僕をじわじわと包んでくる。

疑心が殺意に変わったのは、佐綾に君川という恋人が出来てからだった。

家に帰っても上の空で、携帯電話を見つめてはため息をよく吐くようになった。僕が話しかけても気のない返事しか返ってこず、口を開いたかと思えば恋人の話ばかりだった。僕を楽しませようとかが、気を楽にしてあげようとか、そんなものは一切見られなかった。

きつと佐綾は初めての彼氏に没頭して、僕なんて目にも入らなくなつたのだろう。

きつと僕なんて、最初からどうでもよかったのだろう。

僕はやりきれない気持ちになつて、悔しくなつて、必死に佐綾の視界に入ろうと試みたのだ。

ある日のことだ。

佐綾が携帯で楽しそうに電話をしていた。どことなく頬を蒸気させていて、すぐに電話の相手が君川だと悟つた。

僕は淹れた佐綾の分のコーヒーを彼女の近くに置き、自己の存在をさりげなくアピールした。佐綾はそれを一瞥しただけで、すぐに視線を前に戻し会話を続けた。僕は所在なげにコーヒーを啜つた。

「じゃあ、また明日学校でね。うん、メールするから」

佐綾はそう言って電話を切った。テーブルに肘を付き、すぐにメールを打っていた。その浮かれたような顔がどうしても氣にくわなかった。

「楽しそうだね」

僕は声のトーンを落とす。彼女は小さく頷いただけで、目は携帯の画面を向いたままだった。

「学校で何かあったの？」

そう訊くと、佐綾はやつと顔を上げた。それは話したくて仕方ないという表情だった。僕は佐綾が何を言うのか読めてしまって、また腹の中に黒いものが渦巻くのが分かった。

「今日君川くんがね――」

「君川の話はもういいよ」

僕はきっぱりとその話題を拒絶した。佐綾の表情が曇る。それを見て、どうしてだろうか、佐綾の気持ちを乱してやりたい衝動に駆られたのだ。

「そんなに君川の話したい？」

「え？ いや、だって……」

「それなら君川の話しようか」僕は戸惑う佐綾の目を見た。「君川、中学時代は不良だったんだって？ 喧嘩ばかりして何度か自宅謹慎してたとか」

「どうしたの？ なんであなたがそんなこと」

「一度、佐綾が悩んでるって相談してきたじゃないか。君川は昔不良だったから、今でも煙草を吸うって。どうしたらいいかって」

「それは、そんなことも話したかもしれないけど。もう煙草は辞めてるし、今は真面目に成績上げようと頑張ってるんだよ」

「でも、全然成績上がらないんだろ？」

「でも、でも真面目に」

「せっかく佐綾と一緒に勉強してあげてるのにね。やっぱり君川に勉強なんて無理なんじゃないか？」

佐綾が一瞬、不快そうな顔をする。彼女はすぐに表情を和らげたが、僕はそれを見逃さない。

「どうしたのよ。君川くんを急にそんな風に言うなんて。もしかして君川くんに嫉妬してる？」

佐綾は冗談交じりに悪戯っぽく笑った。口元がぎこちなかった。

「本当に楽しそうだね。あんなクズみたいな男と付き合っても楽しめるなんて佐綾は幸せだ」

佐綾は笑顔を固めたまま、言葉を失っていた。顔に段々表情がなくなり、唇を振るわせ、そして攻撃的な目を僕に向けてくる。

「君川くんを悪く言わないでよ。そんなこと……」

「そんなこと、ある。事実だろ。少なくとも不良だったってことはあんな男よりもっと誠実でいい奴がいる」

「あんたに君川くんの何が分かるの！？」

佐綾はテーブルを両手で叩いて叫ぶ。何故彼女がそんなに声を荒げて怒り出す理由が、僕は全く解せなかった。君川なんかより僕の方が一緒に居た時間が長いのに、どうしてこうやってあんな男は止めろと説得する僕を押しつけて、君川を庇うんだ。

ついに僕は、ありもしない嘘を吐いていた。

「君川、この前また煙草吸い始めたらしいよ」

「嘘つかないで！」彼女は興奮し過ぎたためか、目に涙を浮かべていた。「何よ、君川くんのことなんにも知らないくせに。そういうあんたは……」

佐綾は何か言いかけ、すぐに口を手で覆った。

「ご、ごめん。そんな、私ったら怒るつもりじゃ……」

「いいよ、別に。それより、今なんて言おうとしたんだ？」

「えっ？」

驚いたように顔を上げる。俯き、小さく「別に、何も」と呟いた。僕はもう佐綾の一拳一動が苛立たしくて仕方なかった。どうせ僕のことを、心の中で見下しているくせに。

「僕のこと、可哀想なやつだって思ってるんだろ」

「え？」

「ずっと家から出られなくて、人と交流もできなくて。話相手といえは佐綾しかない。確かに僕は哀れだよな。それで？　そういうあんたは、何？　そういうあんたは、君川ちゃんと違って誰からも必要とされてないくせに？」

「違う、違う！」

「どうせ僕は誰からも必要とされてないさ。学校なんて通えないからテストしたって君川より駄目だろうね。運動も出来ないだろうし。そもそも人と関われないから、必要とされるきっかけすらない」  
「そんなことない。少なくとも私は……」佐綾は首を振り、許しを乞うように泣きじゃくっていた。「あんたを誰よりも必要としているし、かけがえのない唯一の家族なんだよ」

僕はそれを聞いて、笑い出しそうになった。誰よりも必要としている？　恋人が出来てから、僕のことなんかそっちのけだったくせに。

「嘘を吐くなよ、この偽善者」

僕の言葉を聞いた佐綾の顔は予想もしないものだった。てっきり僕はさつきみたいに媚びるように泣き出すのかと思っていたけど、そうじゃなかった。

唇を噛み、眉根を寄せ僕を睨んできたのだ。

「何なの、あんた」

佐綾の声色は底冷えするくらい暗いものだった。

「今まで言わなかったけど、もう我慢ならない。あんた、気味悪いのよ」

佐綾と僕の17年間が崩壊した瞬間だった。

「あんたのせいで、あたしが学校でどういう目で見られてきたか知らないでしょ。あいつの兄はアルビノだって。あいつはアルビノの妹だって。そんな好奇の目で今まで見られてきて、それでも私はあんたを庇い続けてきたのに。それなのに何、偽善者？　なによそれ、意味分かんない。そんな私を君川くんは受け入れてくれたのに。そ

れに引きかえ、あんたはずっと引きこもって不満ばかり言うだけじゃない」

「……そんなこと」

「そんなこと、あるわよ。事実でしょ？」

佐綾は嫌みを込めて僕の台詞を真似た。

僕は耳を塞ぎたかった。しかしそれはしない。この機会に佐綾の本音を聞いてやろうと思ったからだった。

佐綾はそれから思いの丈を口にし続けていた。多分、自分が何を口に行っているのか分からないのだろう。心にもないことを言っているのだ。そう思い込まないと、僕は狂ってしまいそうな気がした。佐綾は敵意を剥き出しにし、僕を睨む。

「本当、あんた邪魔なのよね。死んじゃえばいいのに」

僕の中で、何かが切れた気がした。

僕は何も言わず席を立ち、自分の部屋へ向かった。佐綾は自分の言ったことに気付いたのか、後ろから何か声を掛けてきたが、僕は無視した。

凍えそうな気分だった。僕は部屋の真ん中で体育座りをしていた。彼女が憎かった。

双子として共に生を受けたはずなのに、双子は一心同体のはずなのに。どうして佐綾ばかりいい思いをして優遇されて、僕だけがこんな不当な扱いを受けなければならないのだろう。

佐綾ばかり。佐綾ばかり楽しい思いをして。僕がどんな気持ちで佐綾の帰りを待っているのか、彼女は知りもしないくせに。知ろうともしないくせに。

——思い知らせてやる。

そんな気持ちが僕の中を巡った。そうだ、分からないなら思い知らせてやればいい。自分の箱の中に閉じこもってなければいけない

この状況を。知らしめてやる。

そのとき、僕の箱を開けて佐綾が入ってきたのだ。

目には先程とは違う種類の涙を浮かべていた。彼女は頭を下げた。

「……ごめんなさい」

佐綾の涙が、カーペットに落ちた。

「あんなこと言うつもりじゃなかったの。つい興奮して、あんな心にもないこと」

どうやら謝りに来たようだ。何もかも遅いのに。

「本当に反省してるから。あんたの気持ちも知らずに酷いことを。

私、どうかしてたのよ……」

僕のことを哀れに思ってるのは、本当のことだろ。邪魔だっと思ってるのも本当。死ねばいいと思ってるのも本当！

「許さない」

「お願い。何でも言うこと聞くから。……許して」

なら。それなら。

お前も僕と同じ気持ちを味わえ。

## 15（後書き）

次話で最終回です。

記憶がフラッシュバックを続け、やがてそれが収まったところには、僕は段ボールの前で蹲り嗚咽していた。僕は佐綾を失ったことで、彼女を手にかけたことで、同時に様々なものを失くしていたのだ。

唯一の兄妹を。

無二の家族を。

静寂の安眠を。

自己の抑制を。

外との係りを。

自らの人生を。

佐綾の人生を。

僕はそれら全てをいつの間にか捨てていたのだ。それも一時の下らない衝動と、受け入れきれず爆発した不満で。僕のために献身してくれた佐綾の、少し魔がさしただけの他愛もない兄妹喧嘩の発言で。それを許すことも出来ない僕の手で、妹の全てを奪った。

箱に閉じ込めて自らの所有物にしたと思い込んでいた物は、その結果、あっさりと僕の手からこぼれおちていた。

「ごめん、佐綾。ごめんなさい。ごめんなさい、佐綾」

僕はただの現状を受け入れられない、駄々を捏ねただけの子供だったのだ。

現実から妄想に逃げた、ただの餓鬼だった。

全ては僕の妄想の一人歩き。全ては僕の疑心暗鬼の結果。

許しを乞わなければいけないのは他の誰でもない、僕なのだ。

辺田がいつのまにか後ろから僕の頭を抱いていた。頭の上に彼女の涙が滴った。

「今まで、辛かったね」

そう言ってくれた。こんな僕に、そんな言葉をかけてくれた。辺田にとって、佐綾という大切な友達を奪った僕にだ。

僕はどこまで甘え続ければ気が済むのだろう――。

遠くから、サイレンの音が聞こえた。

あれから一ヶ月が経った。

僕の収容している医療少年院に、辺田彩子が訪れた。

僕は一ヶ月ぶりに彼女の顔を見ることとなった。彼女は係官に会釈をし、まるで教室の椅子に座るかのように自然に机についた。僕がどこに収容されているのか全く気にしていないという素振りだったが、僕にとっては逆にそれが嬉しかった。短い間だったが僕は学校に通っていて、曲がりなりにも教室の空気を味わっていたから、辺田の自然な態度はそれを想起させてくれるかのようにだった。

辺田は面会室のクリーム色の壁を見回す。

「施設といえば聞こえがいいね、少年院って。どう見たって刑務所じゃん」

第一声がそれだった。辺田がそうやって戯けたような風に言うので、僕は思わず苦笑した。

「どう？　ここでの暮らしは」

「大変だけど、あの学校よりはマシだね」

「うんうん。確かに。うちのクラスの連中はみんな陰険だからねえ」  
辺田の爽やかに笑い飛ばすので、僕もつられて笑ってみる。笑うのはいつ頃ぶりだろうと、ふと思う。

「クマ、まだ治らないんだね」

彼女の言葉に、僕は表情を曇らせる。

精神科医の治療は定期的に受けているけど、全くと言っていいほど効果がない。寝ようと思うと佐綾の顔がちらついてしまう。多分まだ罪の重みに耐えきれないんだと思う。いや、罪の重みを感じることは間違いないだろう。僕はそれだけのことをしてしまった。

しかしそういう後悔の念を差し置いて、どうしても眠ることができなかったのだ。

「不安なんだよね。箱から出たと思えば、また次の箱に閉じ込められて」

僕は頷いた。きっと彼女の言葉の通りなのだろう。

あのときほどではないにしろ、僕の中には不安がまだ残っているのだ。

辺田はそんな僕を見て、よし、と手を合わせた。

「じゃあ、君に外の世界との繋がりをあげる」

「え？」

彼女の言葉がすぐに理解できなくて、僕は呆気にとられたように彼女を見た。

彼女は目を細めて笑う。

「毎週土曜日にここに来てさ、外での楽しくて超笑える出来事話してあげる。いい提案じゃない？」

「……でも、なんで僕なんかに。辺田にそんなことしてもらう義理はないよ」

「義理？ そつかそつか、義理が必要なのね……」

辺田は腕組みをして考え込む。僕はそんな彼女を不安げに見つめていた。

「じゃあさ、友達になろうよ」

「ともだち？」

「そう、友達」

友達。

思ってみれば、僕にとってそれは未知の存在だった。友達って、果たしてどういうものだろう。それは想像したこともない。

「友達ってさ無償で助けあえるものなのだよ。そこにはなんの打算も見返りも、義理だってない。これってさ、素晴らしくない？」

「それが、友達？」

「そうそう」

どうやら僕には初めての友達が出来らしい。家族でも恋人でもない、なのに無償で助けあえる。理解し難い存在だな、と僕は思った。全く想像できない、こればかりは僕にも想像できなかった。それなのに、それなのに――。

「ちよ、ちよつと、何で泣いてるの？」

辺田が慌てふためいた声を上げるので、ようやく気付いた。自分の視界が潤んでいることに。

「なんでだろ。自分でも分からないけど……本当に、こればかりは分からないよ」

全く理解できないのに、どうしてこんなに嬉しいのだろう。どうしてこんなに涙が溢れて止まらないのだろう。

これが僕にとっての許しであり唯一の救いであるような気がして、とうとう僕の涙腺は決壊していた。

面会を終えて、係官に連れ立たれて僕は自分の部屋に向かった。

部屋に入り、係官にドアを閉められる。部屋は僕専用特別に用意されたものだった。

目に入るもののほとんどが濃い白だった。

全面が白い壁で包まれていて、あるのは小さな洗面台と壁鏡、そして真っ白なベッド。ベッドの上には、鉄格子の窓。それだけだ。

あの白い箱の中を連想させて、僕はこの部屋に居続ける限り不安に苛まれていた。でも、今日だけは違う。

ベッドに横になり、ベッドの下から小説を取り出して文字を追ってみる。しかし、どうも気分がウキウキして物語が頭に入らない。

小説を放り投げ、僕は半身を起こす。

『友達になろうよ』

辺田の言葉を思い出す度に、頬が緩んでしまう。何度かその言葉を反芻していると、何か懐かしい気配を感じ取った。顔を上げ、そ

の気配の方を見やる。

白い部屋の真ん中には、ハコが居た。

あのときと同じ半透明の身体で、四つの目で僕を見つめていた。もう見ることは二度とないだろうと思っていた僕にとって、ハコの出現は意外だった。なんとなくだけれど、ハコはずっとこの部屋に居て、ただ僕が存在を確認出来なかっただけなのだと思う。

しばらく口を開いてなかったせい、ハコが口を開けるとくっついていた和紙のような皮がぴりぴりと破れた。

——もう、君にとって僕は必要ないんだね。

ハコが少し寂しそうに言うので、僕は出来る限りの笑顔でふつと笑いかけた。

「そうだね。ハコを見る理由はもうなくなった」

——不安はもうないってことだね。

「そう。これからはちゃんと自分の犯した罪と向き合っていく。ちゃんと現実を見据えて生きていく。これが僕の贖罪」

——うん、それがいい。そうするべきだ。どうか、強く生きてね。

「ああ、お別れだ。ハコ」

——最後にもう一つ。

「うん？」

——君はいつか、所詮人は誰かの箱の中だ、なんて思っていたけれど、あれは間違いだよ。僕は最初からそんなこと伝えようとなんかしていない

「そうなのか。つまり君は、僕に何と言いたかったの？」

——たとえ誰かの箱の中にいたって、やっぱり誰かがその箱を開けにくるのさ。ってね。

「……全く、その通りだ」

ハコの言葉に虚を突かれて、僕は思わず感心してしまう。

——じゃあ、今度こそ本当のお別れ。

「うん。さようなら、ハコ」

——さようなら。

ハコが居なくなるのが名残惜しくて、僕に色んな事を気付かせてくれたハコが消えるのが寂しくて、僕は目を開いていた。

耐えられなくなって瞬きすると、ハコはすっと煙のように居なくなっていた。

ふいに強い疲労感が僕を襲う。それは心地よい疲労感だった。今なら全てを忘れて眠りにつくことが出来そうだ。

僕はベッドに横になり、目を閉じた。

もう不安はない。過去を見据えて未来を夢見る。今はそんな希望を抱ける。

僕の意識は驚くほど急速に安穩に包まれていった。

## 16（後書き）

乱雑な仕上がりであったことをここでお詫びします。  
最後までお読み頂きありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7934k/>

---

ハコ

2010年10月8日14時23分発行